



第2部 ヘイトスピーチを超えて(講演&シンポジウム &上映会 市民的不服従と現代Ⅰ：「共生」：問わ れる日本社会)(パネルディスカッション：問われ つづける「共生」：ヘイトスピーチの時代に)

著者	崔 真碩
雑誌名	東西南北
巻	2016
ページ	42-46
発行年	2016-03-18
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003982/

ヘイトスピーチを越えて

崔 真碩 広島大学大学院准教授

——産経事件と学生M

こんばんは。アンニョンハセヨ。崔真碩です。私は、和光の卒業生で、卒業後に大学院に進み、一生懸命に勉強頑張って大学教員になったのですが、ヘイトスピーチにさらされることになって、いろいろ大変な思いをしているところです。今日、私個人的には和光への凱旋なのですが、ヘイトスピーチのことを話すので不名誉でもあり、しかし、今日こうしてリケット先生の退官記念シンポジウムに呼ばれたことを光栄に思っております。



まず、レジュメを用意できなかったことを謝罪しなければなりません。この間、ずっと複雑な想いでいました。破綻した今の社会の中で何を発言すればいいのか、いろいろ考えては行き詰まって、何もまとまらないまま今日の日を迎えてしまいました。和光に来られたことは本当にすごく嬉しいし光栄なのですが、じつのところは重い気持ちを抱えながらやってきました。

ただ、資料が一つありまして、私が今年の『現代思想』10月号に発表した「産経事件と大学の危機」という論考¹⁾がありますから、ぜひそれをお読みください。

産経事件の概略をお話ししますと、私が去年の5月にドキュメンタリーの授業をやったんです。オムニバス形式の「演劇と映画」という授業で、私が担当した1回の授業の中で、『終わらない戦争』という「従軍慰安婦」を扱ったドキュメンタリー映画²⁾を上映しました。受講生200人を前にして、ドキュメンタリーについての短い講義をした後、『終わらない戦争』を優れたドキュメンタリー作品の一例として丸ごと見せたんですが、そのことを問題視した学生が、私を通り越し

プロフィール——崔 真碩（チェ・ジンソク）

1973年、韓国ソウル生まれ、東京育ち。和光大学表現学部文学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。学術博士。現在、広島大学大学院総合科学研究科准教授。文学者。「風の旅団」を前身とするテント芝居「野戦之月海筆子」（ヤセンノツキハイビーツ）の役者。主編訳書『李箱作品集』（作品社、2006年）。主なエッセイに「影の東アジア」（李静和編『残傷の音』岩波書店、2009年）など。主な出演作に『蛭てんでんこ』（2013年東京）など。著作に『朝鮮人はあなたに呼びかけている』（彩流社、2014年）。

1) 崔真碩「産経事件と大学の危機」『現代思想』2014年10月号。

2) 『終わらない戦争』金東元監督、60分、2008年。

て、産経新聞の「読者欄」に投書しました（2014年5月8日付）。続けて、産経新聞が当該授業をバッシングする形で一面記事で取り上げました（同年5月21日付）。さらには、衆議院内閣委員会において某国会議員から当該授業を批判するような発言が行われたことで、問題が大きくなりました。その後、ネット上では、私に対する不当な非難と中傷がエスカレートし、私の研究室の電話が鳴り止まない状態が続きました。同時に、大学への苦情と脅迫がしばらくの間続きました。以上が簡単な経緯です。

私が今日皆さんにお話したいのは、私が今までどうやって生きてきて、今をどう生きていて、これからの時代をどう生きていこうとしているかということです。今日のシンポジウムのテーマである「共生」とは、私自身のテーマでもあり、ライフワークでもありますから、そこに繋げてお話をします。

まず、今日、呉監督の指紋押捺拒否運動のドキュメンタリーを見ながら思い出すのは、私自身が1989年、16歳のときに指紋押捺をしたことです。あのとき、正直に告白すると、先輩たちが拒否運動している姿を、「ケッ」っていうふうに感じていたように記憶しています。先輩たちの姿が見えなかった。私は当時、日本名を名乗っていました。

あの日、区役所に父親に連れて行かれたんですが、そのときに、役所の人とか、あるいは日本国家、法務省とかに怒りをぶつけるんじゃなくて、父親に怒りをぶつけてました。こんな面倒で屈辱的なことをするのは、「お前のせいだ」みたいな。

人としての成長過程において、私にとって、これがある意味、原体験的なものです。どん底でした。どれだけ人間としての尊厳が踏みにじられていたか。人間性をはく奪されて、意志も尊厳も踏みにじられているのに、それが当たり前だと思っていた。外国人が、韓国人が、指紋押すのは当たり前だと思っていたんです。日本社会で生きながら、そのぐらいコンプレックスに打ちのめされていたんです。

呉監督の映画を観ながらあの日のことを思い出していたのですが、私はそこから、どん底から、自分自身の尊厳を回復してきたんだと思います。

ちょうど今年、実は厄年で、厄年のせいで産経に叩かれ、ヘイトスピーチにさらされているのかなと、半分冗談なんですけど、そう考えないとやってられないところがあります。あの時もすごく尊厳を踏みにじられて、今も踏みにじられていて、なんなんだよっていう怒りがあります。ずっと怒ってます。やっぱり、許さない。

産経事件の話に入りますが、19歳の学生が投書したんです。Mという形で拙稿「産経事件と大学の危機」の中に出てきます。去年5月の産経事件後の7月末に当該授業の補講があって、その際、彼と10分ぐらい立ち話をする機会がありました。

そのときに、「文句があるなら面と向かって言えよ。俺はパーチャルじゃない、生きてる生身の人間だ」って話をしたんですよ。自分でも不思議だったのですが、

彼と会ったとき、私はできる限り彼に触っていたんです。なぜかという、きっと、それまで「見えない恐怖」がすごくあったからだと思います。鳴り止まない電話やネット上でのヘイトスピーチの「見えない恐怖」。敵が誰だかわからない、どれだけいるのかわからないというのは、本当に怖いんです。

事件があって2か月後に初めて彼に会って、なるべく彼の顔をじっと見て、肩をポンと叩いたりして触れることで、恐怖心が取れたんです。私は無意識に、彼が人であることを確認しようとしていたのだと思います。さすがにまだ握手はできなかったですけど、彼と直接面と向かって話し、触れることで、私はヘイトスピーチの恐怖を克服しました。

私と話している間、彼はずっとふてくされた感じで、私と目を合わせませんでした。「あの映画の何が気に入らないのか。」と彼に訊いたときに、彼はこう言うんです。『終わらない戦争』の中で、日本の敗戦後も中国に残ったイ・スサンさんという韓国人が証言の中で、慰安所を逃げ出したときに日本兵に捕まってしまう、リンチをされて日本刀で焼きごてを当てられたときの話をしながらその傷を見せるシーンがあるのですが、「あれは、嘘だ」と言うんです。「なんで？」って訊いたら、「天皇陛下から賜った日本刀でそんなことをするわけがない」と。私は笑えなかった。なぜかという、その瞬間、彼は私と目を合わせてすごい光を出したんです。目から。本当に真剣な目でした。これは、彼のアイデンティティの物語の全てなんだと直感して、圧倒されたんですよ。

家に帰って、ネットで「天皇陛下、賜った、日本刀、そんなこと、慰安婦」って検索したら出てくるんですよ、彼の言っていたことがそのまま。要するに、彼が私に主張したことは、慰安婦の歴史がなかったという人たちの論拠の一つになっているようです。本当に陳腐だし、むなしいし、怒りを通り越して笑ってしまうような物語なんだけれど、しかしこれが彼の物語の全てなんだということを目の当たりにしたときに、私は圧倒されると同時に負けたというか、やり直さなきゃいけないんだと思いました。

—— 歴史の語り直し

慰安婦問題は、教育現場での語りもそうだし、次の世代への歴史の語り継ぎもそうですが、性教育のあり方も深く関わってくると思います。慰安婦が売春婦だったとか、そんな歴史はなかったという人は、きっと家ではレイプ物のAVを見ているのではないのでしょうか。今の日本のサブカルチャーは、この20年間で性的にどんどん過激になっていて、レイプ物が過剰に商品化されています。そんなに遠く離れてないんです。慰安婦はなかったとか、慰安婦は売春婦だったという認識と、あたかもレイプを肯定するようなサブカルチャーを消費することとは。性教育も含めて、「語り直し」をしなきゃいけないと痛感しています。

私自身、非常勤を含めて教壇に立ち始めて10年近くになりますが、毎年慰安

婦のことを取り上げています。私の専門は、元々は朝鮮文学なのですが。この10年は歴史認識をめぐるバックラッシュがあって、特に慰安婦の問題がずっとホットです。しかし、学校ではまったくと言っていいほど教育されていない。だから、私が教えなきゃいけない、私が教えなかったら結局大学の中で知る機会がないまま卒業していく学生がほとんどなので、私が教えずにはという想いでいます。

梁さんのお仕事も紹介しながら授業で慰安婦問題を取り上げてきました。ジェンダー意識とかセクシャリティ意識とか、私自身、自分を解体しながら向き合ってきたつもりですが、もう1回、ボルテージを上げて、言葉を強く、しなやかにして、身体を柔らかくして、M君のような学生に届く言葉で、歴史を語り直さなければならない。M君に向かって何が言えるかということで、私自身が試されているのだと思います。

彼には授業に来てくれと、研究室に遊びに来るだけでもいいからと言って別れました。M君のような学生は一握りですが、しかし、100人、200人のレポートを読んでいると、結局は歴史修正主義を黙認しているサイレントマジョリティが多いな、というのが正直な感想です。歴史認識がまともでないというか、歴史がないんです。歴史の物語が語り継がれてない。その点においては、M君のような学生もサイレントマジョリティも大差ありません。

結局、日本の右翼の人たちもそうだし、私もそうだし、上の世代の人たちが下の世代に歴史を語り継いでいない。これが今日の日本社会における歴史認識の問題の現実であり、核心なのでしょう。語り継ぐことをやり直さなければいけない。私は今、危機感を持って教壇に立っていますし、自分の言葉を紡いでいます。

—— 虐殺を煽るヘイトスピーチ

産経事件についてはこれぐらいにして、ヘイトスピーチの話をします。ヘイトスピーチは一昨日もクロズアップ現代で放送されたり、あと在特会（在日特権を許さない市民の会）に賠償を命じる最高裁判決もありましたし、日本社会でもそれなりに認知度は高まってきたと思うのですが、しかし、本当のところはわかってないんじゃないか？ というもどかしさがあります。

ヘイトスピーチは「差別扇動表現」とか「差別憎悪表現」といいますが、今ではもう差別とか憎悪どころか虐殺を煽っています。実際に「殺せ」と言ってますよね。問題はそこなんです。

私は今日の日本社会に蔓延している虐殺の暴力を、9・17からずっと予感してきました。

2002年9月17日、日朝平壤宣言で拉致問題を金正日総書記が認めた後に巻き起こった、あのときの日本社会のむき出しの憎悪。朝鮮人だったら誰でもいい、というような。それは、今の「いい韓国人も、悪い韓国人も、みんな殺せ」みた

いに虐殺を煽る空気と同じものです。あのとき、そういうふう to 日本社会の空気を讀んだとき、後ろから刺されるのではないかという予感がしたんです。居ても立っても居られない、ざわついた感覚。これはなんだろうって考えたときに直感したんですよ。1923 年の関東大震災時の朝鮮人虐殺を。当時の空気がずっと残っていて、それが今むき出しになったんだということを、今から 13 年前に知覚したんです。

——最悪を予感する

9・17 は、私にとって人生のターニングポイントになりました。その後、後ろから刺されるってということがずっとテーマとしてあるんです。日本社会に生きる感覚としてずっとあって、それがどんどん現実味を帯びてきたという感じです。だから、在特会の出現もそうだし、私が昨年ヘイトスピーチにさらされたこともそうですが、ずっと覚悟してきたことなので、冷静に向き合っているつもりでいます。私は、教育者でもあり文学者でもあるので、文学的想像力をもって最悪を予感しながら、最悪にとどまって最悪の事態を言葉にしなければいけないと、常々そう思っています。それが文学者の役割であると。

今のヘイトデモを見ている警察が守ってるじゃないですか。結局あれって 1923 年 9 月に国家権力が虐殺に加担した姿と同じなんです。このままだったら再び虐殺が起これかねない。私はそういう時代感覚で生きています。私は、最悪を予感しながらそこに踏みとどまって言葉を紡いでいます。最悪を予感して、最悪に身構え、最悪の未来をなんとか回避したい。虐殺が繰り返される未来をとにかく防ぎたいと、今、切に思っています。

最後に一言ですが、さっきリケットさんが「拒否」って言葉を最後に出されましたが、あの言葉に触発されて生き方の方向性が見えました。

私は、排外主義の暴力にさらされています。排外されている身でこんなこと言うのもなんですが、私、日本という国家は、もう「拒否」します。近代日本という国家はもう駄目だし、また虐殺を繰り返すようならこんな国家は本当に早く終わってほしい。東京オリンピックなんて糞食らえです。

私はよく反日教師と言われますけど、そうだ、私は反日だと思ってます。だけど、誤解しないでほしいのは、反日と言うのは、反日本帝国主義、反日本軍国主義の略なんですよ。今の政権の暴走ぶりは言うまでもなく、また白けたファシズムが再来して、日本社会も元気ないし、沈滞してるし、とにかく日本という国家はもういい。「拒否」したい。

しかし、いや、「だから」なんですけど、私は日本社会を絶対に諦めない。他者との共生を諦めない。そのことの実践として、教壇に立ち、文学者として生き、これ以上朝鮮人虐殺を繰り返させないという未来を求めたい。以上です。ありがとうございました。